獣物語

火炎放射機

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サーバルちゃんと阿良々木くんのどったんばったんな旅

目次

サーバルみんみ1 ―― 1
サーバルみんみ2 ―― 24
サーバルみんみ3 ―― 48
サーバルみんみ4 ―― 65
コツメわーい1 ―― 89
コツメわーい2 ―― 95

サーバルみんみ1

［自宅］

僕は今日、特に何の予定もなく只ひたすらにひたすらと退屈を満喫していた

［休日］

やれ、怪異だの、頼まれ事だの、頼み事だの
そういった今までにあったあれやこれやそれなんかが、ひとまず一段落したと思える、そんな何もないただ普通の、ありふれた1日となろう
そう、何の予定もない、何も起きていないであろうこの最高に退屈な時間を貪りに

貪っていた

［真昼間］

妹達もなにやら友達のところへ遊びに行くとかで、我が家は僕１人お留守番となっている

「全く、真っ昼間から何の予定もないであろう兄である僕を１人にしてしまうなんて」

なんて薄情な妹達なのだ、とは思っても、まあ、火憐ちゃんも月火ちゃんも、いつまでたってもこの僕という兄から兄離れができなさそうな妹のことだからな、うん、そうだ、たまにはこういう時間も必要なんじゃないかな

そうだとも、決して僕が寂しいというわけじゃない

・・・・ゴロン

［　寂　］

家に、そして自分の部屋に1人で居るわけだが、でも誰かを呼ぼうとか、どこか誰かの所へいこうかという気は特になく、これといって勉強や読書なんかもする気が起きなかった僕は特に何も考えつくこともなく、只ベッドで横になっているのである

「うーん」

・・・・・ゴロン

つまるところ、ただの昼寝だ、最近は起きている間といえば大体誰かと居たり問題に奔走したりと、前の「人間強度を下げたがらない」僕とはだいぶ違っていると言える

だからこそ、この忘れかけた平和な退屈という時間を、平穏な今を、退屈で何もすることが無いこの時を、全力で満喫しようではないか

（たまにはこんな日があったって良いかもしれない）

・・・・・ゴロン

それに甘んじてお昼寝だ

・・・・・・・・・・〜〜

・・・・・・・・・ＺＺｚ

・・・・・・・・ｚＺ・・・・・・ＺＺｚ

・・・・・・・・・Zz・・・・・・・・・

～～～～～～～～～

・・・・・・・・ゴロン

・・・・・・・・・・・・

んん・・？

（なんだろう、ベッドで寝ているわけだが、布団が妙に硬く感じる・・・寝返りでベッド

から転げ落ちてしまったのか？）

「んん・・・・」

ザア・・・・・

「・・・・え」

［　目覚　］

ここは？

［　木　］

「ここは?」

［　草原　］

「なにがあって僕の部屋がこんなワイルドな仕様に変わっているんだ!?」

夢?いや、夢でなくては困る、まさか僕が夢遊病にでもなってこんな自分でも分からないところまで歩いてきた、だなんて思えない

僕は至って正常だ、健全な高校生だ、きっと

――スン

そよぐ風が運ぶ、母なる大地の匂いと言うべきか、もう完全に木とか草とか土とかが

色々混ざった、都会育ちの僕にでも分かるくらいの、溢れんばかりの大自然な空気が溢れ、それ相応の景色が広がっていた

「・・どうなってるんだ」

部屋のベッドで寝ていたはずが、突然、荒れてはいないが荒野というか、本やテレビなんかで見たことがあるようなサバンナやサファリパークといった感じの、広大な自然の中に、今ぼくは居る

そして何やら、そこかしこが虹色にキラキラ光っている、不思議な光景だ

ここがどこだか、なんでこうなってしまったのか訳が分からないがとにかく動こう、もしかしたら、いや、それこそ今までがそうだったように、僕はまた［怪異］に遭っているのかもしれない

・・・・・・スゥ・・・スゥ・・・

ガサ　　ガサ

・・・・・・・・

ガサリ　　ガサ　　ガサ

「！」

バッ　〜〜

「つな!?」
近くの木の中から、少女が飛び出してきた

～～～フワァ～～

（何色だ!? いや、覗こうとしている場合じゃない！）

ダダダダダダダダダダダダ！

［　走　］

ダダダダダダダダダダ！

僕はなんだか無性に、何かが始まりそうな気がした

なにか冒険なような

ドキドキとワクワクが溢れるような

そういえば、戦場ヶ原と初めて出会ったときも、降ってきたのを受け止めるといった形での、こんな感じの出会いだったようなーーー状況は随分違うが

ダダダダ　　バッ!!

僕は降ってきた少女へ全力で向かって、抱き留めるようにキャッチした

「うみゃーーー?!」

「へ・・・?・・・耳・・?」

キャッチしたその時、僕はその少女の頭に付いてるそれを見て、つい言葉が漏れた

その途端

「うっわぁー！すっごーーい!!」

［　凄　］

僕にキャッチされたまま感嘆の叫びを上げるこの少女のことを、瞬間的に僕は大好きになった

「すごいねすごいね！狩りごっこだとおもって私が追いかけるつもりだったのに！」

［　狩　］

「木から飛びおりた私に向かって走ってきて、ジャンプして捕まえちゃうなんて！狩りごっこがとっても上手なんだね！すっごーい!!」

狩りごっこ?んーまぁそうだな、八九寺に対する愛情表現の代わりとして、狩りを為すような気持ちで紳士的にあんなことやこんなことをしてきたものだ、だがそれはきっと些細なことだろうから良いとして

この、とてつもないほど純粋な目と表情で、僕に凄い凄いと言いながら大人しく抱っこされてくれている少女の、やや不思議な格好に、さすがの僕も間の抜けた言葉が出てしまう

「豹柄?なにかのコスプレ?」

すると、パっと軽やかに僕の腕の中から降りた少女は言う

「ヒョウじゃないよ!私はサーバルだよ!」

「サーバル?」

サーバル、サーバルか・・・この少女の頭についている猫のような大きい耳と、チー

ターとか豹と似た感じのまだら模様から見るに、猫科の動物のサーバルキャットというものだろうか？

　　まてよ、キャット、つまりは猫

「猫」というものには些か心当たりがある、羽川翼がそうであるように、この女の子にも何かそういう類いの物が、怪異が憑いているのだろうか？

　　と、そんな事を考えたが

「ねぇねぇ！きみはどこからきたの!?名前は？その頭に付いてるのはなに？」

（

ゾ

シ

「うぅーわぁー！うごいたー?!なんなのこれー！ふっしぎー！」

（凄い食い付きだ、羽川にも効果があったりするんだろうか?）

とても天真爛漫な、無垢であどけないその表情や仕草の1つ1つ全てが、僕の頭の中に浮かんだ今までにあった、かつてのアレやコレな怪異の想像に蓋をし、さらにその上に大きな石の重りを置いた

「これは僕のチャームポイントだ」

「ちゃーむぽいんと??なにそれなにそれ?気になるー！」

「うみゃ！みゃんみゃんみゃんみんみー！」

ツンツンペシペシとじゃれては、僕（のアホ毛）に夢中なこの少女、だが、とりあえずすぐにでも聞いておきたい事を訊ねておくことにする、なんだかこの子を見ていると、今自分の身に起きているあらゆることを忘れてしまう、何もかも許してしまえるよ

うな気持ちになってきてしまっているからだ

「なぁきみ、ここはどこなんだ？それと君は？」

少女は腕を広げて言った

「ここはジャパリパーク、私はサーバルだよ！この辺は私のなわばりなの！」

「ジャパリパーク？」

「そ！ここはジャパリパークのさばんなちほーだよ！」

ジャパリパーク？聞いたことがない、いま頭の中でタララ～ラ～ラ～♪タララ～ラ～ラ～♪という、ジュラシックなパークの壮大な音楽が流れたが、これは違う気がする

ふと「オールウェ～イトゥ～ギャザ～♪」と歌い出したくなってきたが、これはアドベンチャーなパークのＣＭソングだっただろうか？

というわけで、もうさっぱりだ、ジャパリパークという物が僕の生きていた世界に

あっただろうか？テレビや雑誌か何かで見たことも聞いたこともない

「ねえねえ！あなたのお名前は？なんていう動物のフレンズなの？おおきなフレンズだね！」

「ぼくの名前は阿良々木、阿良々木　暦だ・・・え？　フレンズ？」

あれかな？この出会った瞬間から、君と僕とは友達！みたいなことだろうか？

「うん、ジャパリパークにはいーっぱいフレンズがいるんだよ！」

なんだって？サーバルちゃんみたいな少女が、ここにはいーっぱい居ちゃうのか!?

あぁ、これはまずい、とてもまずいぞ！もし今の僕が、少し前の「人間強度」を頑なに保ちたがっていた僕のままだったら、きっと狂わずにはいられない！　今の僕でさえこのサーバルちゃんという少女に心を鷲掴みにされてしまっているんだ、耐えられるものか

僕は少し取り乱してしまっているようだ、ふぅ・・落ち着け、よし

先に断っておくと、僕は決して幼女趣味なんかではなく、むしろどちらかというと大

人な感じの、落ち着いた女性がタイプだと言える、そう、例えば羽川とか、他にも羽川とか、羽川みたいな感じの、だからぼくに幼女趣味や、少女趣味という性癖があったりする何てことはない、うん、いいぞ、落ち着いてきた

［オチツケ］

断言しよう、八九寺に関して言えばだが、僕は今まで沢山のあらゆる行いを仕掛けたことがあるけれど、それについてはいくらでも弁論の余地が僕にはあると思うんだ、え？無い？はは、そんな馬鹿な

健全な高校生であるこの僕のことだ、サーバルちゃんからは健全な魅力を見出しただけに違いない！

［ケンゼンナキュウケツキ］

とにかく、つまりはだ

ぼくはこの子を愛さずにはいられない!!

「なんだか面白い名前だね！アラ・・アララ？ありゃりゃ？」

「阿良々木暦だよ」

「アラヤギ？ヤギ？あにゃにゃ・・うみゃー！えーっと、コヨミっていうんだね！よろしくね！コヨミ・・ちゃん？」

（くぅぅぅぅーーーー!!名前呼びぃぃーーー!!!）ガッツポーズ

「なになに？どうしたの!?楽しそー！なにかいいことあったのー!?」

サーバルちゃんの言葉に、ふと怪しいアロハシャツを着た男の口癖を連想したが、いまこの場合、良いことがあったので全く勘に触らない

「いや、大丈夫だよ、僕の名字は阿良々木だけど、うん、暦でいいよ、なんなら暦お兄ちゃんでもいい」

「みょーじ？んー、わかんないや！じゃあこよみおにいちゃんで！」
「コヨミおにいちゃんもフレンズみたいだけど、なんだかわたしたちとちょっとちがうね！きみみたいなフレンズ、初めて見たよ！どこからきたの？」

僕の名字はどうやら少女にしっかり覚えられていないようである、これが八九寺なら問い直して訂正を申し出る所だが、まぁ、このサーバルちゃんという少女の前では些細な問題として置いておく、それよりも、さっきも出たこの「フレンズ」という言葉が気になる、ついでにどこから来たかというと僕は自分の部屋で寝てたはずだ、自らここへ来たのではないだろうから何とも言い難い
「どうやって僕はここに来たのかは僕自身も分からないんだ」
「ところで、なぁサーバルちゃん、さっきから言ってるフレンズっていうのは、どういう意味なんだ？」
「あれ？知らないの？こよみおにいちゃんはさっき生まれたフレンズなのかな？」
「え？僕はさっき生まれたのか!?」
「あの山からキラキラしたのがふきだしてるでしょ？あのキラキラしたサンドスターっていうのにあたって生まれるのが、フレンズだよ！」

サーバルちゃんが指をさした方を見ると山があって、その山頂には確かに何か煌めいてる物が見える

「ほら、まだ周りがサンドスターでキラキラしてるでしょ?」

ここで目覚めてから気になってた、あちこちでキラキラしている光の正体は、どうやらサンドスターというらしい

「わたしもよくわからないんだけど、サンドスターには不思議なちからがあるんだって!」

サンドスター・・・全然わからない、これまた不思議なものが出てきたようだ

サーバルちゃんと出会って、話して分かったことは

ここはジャパリパークで、僕はサンドスターという不思議なものでフレンズになって存在している、ということだろうか

「ねぇ、こよみおにいちゃんはなんのどうぶつなのか覚えてる?」

ふと、突然の質問に

「え？ええ・・と」
言葉が詰まった
僕はかつては人間 ”　だった ”、そう、吸血鬼になるまでは
だが僕は、人間だった時の阿良々木暦としての生き方も全うするつもりだ、そこに迷いはない
そして今は、人間であり、吸血鬼であり、フレンズなのだろうか

すると
「そうだ！わからないならとしょかんで調べたらいいよ、ハカセたちもいるし、なにか分かるかも！」

「え？図書館なんてあるのか？ハカセ？」
「うん！あるある！わかんないときは、としょかんで調べたりハカセに聞くんだよ！」
知っている単語がやっと出てきた、それに対して僕はいくらか安堵した気分になる
「私があんないするよ！いこいこ！」
「それは助かるよ、ありがとうな、サーバルちゃん」
「えっへん！まっかせてー！」

こうして僕は、ジャパリパークの中にあるらしい図書館へと向かうことに決めた、僕が何故ここにいるのか、どうなって此処へ来たのか、なんの手掛かりも掴めないままなのは少し癪だし、何よりサーバルちゃんが行こうと言うのだから、間違いないはずだ

「が～いど！♪が～いど！♪さばんなガーイドー！♪」

なにやら楽しげに口ずさんでいるサーバルちゃんに、今は全て委ねてしまおう

退屈だった何もない日が一変してこんな事態になったが、ただ悪いだけの事が起きているわけじゃなさそうだと考えて、一人の男の子としてドキドキワクワクな大冒険になりそうな期待に、僕は胸を踊らせていた

サーバルみんみ２

「ひろくて見晴らしいいでしょー！」

サーバルちゃんに図書館まで案内されることになった僕は、サバンナ地方という地を歩いている

「うん、サバンナなんて初めて来た」

辺りを見ながら、自分が今まで暮らしていた場所、よく行っていた場所なんかを思い出す、自分の部屋、学校、廃墟となった学習塾跡、誰かの家、神社、等々・・・

ふと、サーバルちゃんが言っていた事も思い出す

「そういやサーバルちゃんは、ここらへんが縄張りって言ってたよな？」

「うん！そーだよ、あったかい風が気持ちいいし、いいところでしょ」

「うん、でもサバンナ地方にはサーバルちゃんだけしかいないのか？」

ジャパリパークのサバンナ地方というところで目覚めてからは、サーバルちゃんしか目に入らない、あぁいや・・決してサーバルちゃんだけをガン見しているということではない

こんな広大な自然の中で自分の縄張りを持つなんて、もしかするとサーバルちゃんはすっごーい！少女なのかもしれない

そして、そう

サーバルちゃんの他にも〝フレンズ〟が居るのかということも、確かめたかったというのもある、さっき他にもフレンズが居ると聞いたから僕は少し気になっていた

「まさか～、他にもいっぱいいるよ！　たとえば～・・あっ」

「あそこにシマウマちゃんがいるねっ！」

「えっ!?シマウマちゃん?どこだ?シマウマちゃーん?どこなんだ?」

食い気味になって、ついテンションが上がる僕である

「どこだろう?見つからないな」

「あー、隠れちゃった」

サーバルちゃんが指差す方を見るのが遅れたのか、僕にはシマウマちゃんを捉えることは出来なかった、残念だ、サーバルちゃんをひたすら見て癒されようか

「あとはね～・・・その隣にトムソンガゼルちゃんがいるよ！」

「つなに?トムソンガゼルちゃん!?」

サーバルちゃんから視線を外して、またサーバルちゃんが指差す方を見れば

「あっ！ほんとだ、居る！」

居た、草むらの側に女の子!!

の、後ろ姿しか見えないが、そしてこれまた、何か頭に生えていて動物のコスプレのような格好を・・・

いや、違うか、この考え方はもう捨てた方が良いな、うん、やめよう、ことここにおいて、動物の格好をしたこの子達は”フレンズ”という存在なんだと頭に叩き込もう

”コスプレをした女の子”よりも、”動物が女の子になっている”という世界だと考えた方が、ロマンがあって良いじゃないか！

僕もそのフレンズということなら、そうだ、郷に入っては郷に従え、というやつだ

この世界”ジャパリパーク”に入っては、ジャパリパークに従おう

「ほかにもいっぱいいるよ！さばんなちほーは広いから、たっくさんフレンズがいるんだ！」

「な、なんだって!!」

［興奮］

このサバンナ地方という場所でひとり目を覚ました時は、まさか、なにか良からぬ物に化かされているのかと、今までに自ら経験したことや、僕の身近な者に取り憑いた怪異の事を考え、最初は身構えたりもしたものだが

今はもう、いや、もはや安堵と期待に包まれているといっても過言じゃない

それほどまでに僕は安心して浮かれていた、もしここが危険な所だったら、僕が居てはならない場所で、良からぬ怪異に貶められているのだったら、そう、つまりそういうことだ

僕と命で繋がっている、ペアリングだとか、運命共同体だとか、言葉を並べれば並べるほどにその繋がりがどういうものか、説明するには難しい

そんな奴が僕の中にいる

［　キスショット　］

［　アセロラオリオン　］

［　ハートアンダーブレード］

そうだ、忍が出て来ないっていうことは、今現在、僕に危険は及んでいないということだろう、ペアリングが切れた感覚も無いなら、きっと僕の影の中で眠っているか、今この状況を分かっていても相応の「何か」が起こるまでは見を決め込んでいるのだろう

だから僕はウキウキでいられるというものだ

「としょかんはじゃんぐるちほーの先だから、まずはサバンナの出口までいこっか！」

「え?・こんな広いサバンナの出口?・かなり遠いのか?・」

目に映るこの大草原の出口、と聞いて、だいぶ時間が掛かりそうな距離だと思ったが

「すぐ近くだよ、さ、いこいこ!・」

ピョンピョンと跳ねるように飛び進む、とってもかわいいサーバルちゃんが言うのだから、僕は信じるしかない

もちろん、なんで僕がここに居るのだろうか、という不思議な疑問は残るが、今は深く考えなくても良さそうだと思えるくらいに、すぐ目の前で道案内をしてくれるサーバルちゃんが、僕を安心させてくれている

〜〜〜〜〜〜

さて、少し進んだ先には、崖があった

「・・えぇっと、行き止まりか」

と言って、隣に居るサーバルちゃんを見た矢先

サーバルちゃんはぴょーん、ぴょーんと、いとも簡単にこの崖を、スキップ感覚で降りていった

僕はちょっと驚いていた

「はやくはやく～！」

「ええ!?そんなノリでいけちゃうのか?」

「いけるいける！だいじょーぶだよ！」

「よーし・・・僕も男だ！」

サーバルちゃんのように、まず少し下のせり出した岩へと飛び降りて・・

――が

「うううぅわあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

［　落　］

ザザザザーー！　　ドッ

うまく着地できず、ザザーっと勢いよく滑りながら落ちた僕だった

「わー！だいじょーぶ!?」

「いってて・・うん、大丈夫だ」

まぁその、ぼくがフレンズになっていたとしても、吸血鬼でなくなっているわけではなさそうだから、ちょっとした打ち身くらいなら直ぐに治るだろう

なによりサーバルちゃんを心配させるわけにはいかないからな、うん

～～～～～～

さて、崖のつぎは池か

と思ったら、サーバルちゃんはまた

「えっ、やっ」

ぴょんぴょーん、と間にある岩を足場にして飛び越えて行った

サーバルちゃんの身体能力の高さは計り知れない、といっても、まだ出会ったばかりだから知らないのも当然か

にしても、跳ぶにしては先の岩までちょっと距離がある

だが、僕の吸血鬼としての能力を使えれば違うのだろう

よし、一応の確認としてやっておこう、決して僕がサーバルちゃんに良いところを見

せて、また「すっごーい！」と喜んでもらうためだなんて考えたりはしてないんだ
うん、忍との繋がりは感じられる、が、もし僕の勝手の思い込みなだけだったらいけないからな！
すっごーい僕を見てもらおうなんて
すっごーい！とはしゃいで貰おうなんて、そんな調子に乗ったことは考えちゃいないんだ

そう、さっきみたいに失敗してサーバルちゃんを心配させちゃいけないからな

そう、これはただの確認だ

タタタタタタタ

「ーーっ!!」バッ

〜〜〜タッ

ひとっ跳びでサーバルちゃんのところまでいって、よし
やっぱり僕は残念ながら・・とはもう今となっては考えなくなってきたが、人間ではないみたいだ
「うーわぁー!!すっごーい！1回のジャンプでこっちまで飛んできちゃうなんて！」
うん！これが見たかった！
はしゃいでくれるサーバルちゃんに、僕の心はトキメキ　ｔｏ　ｎｉｇｈｔ　ミ☆だった
「最初に会ったときのかりごっこのときもすごかったし、コヨミお兄ちゃんってもしかして、私と同じねこかのフレンズだったりするのかなー!?」
［　猫　］
僕はそうじゃなさそうだが、羽川だったらフレンズになればもしかしたらそうなるの

だろうか

「そうだといーな！いーなー！」

腕をブンブン振ってピョンピョン跳ね、サーバルちゃんが僕を見ながら楽しそうにしている

「うん、そうだといいな」

僕がサーバルちゃんのような種類の仲間のフレンズじゃないと、たとえ分かっていても、サーバルちゃんが願うなら ”そうだといいな” と思えてしまう

そう、可愛いは正義だ

～～～～～

さて、また歩いて行っていると

ピョコン

［　怪　］

岩の影から、もうここへ来てから何度目になるだろうか、これまたよくわからない、物体Xが現れた

「えっ、なんだこれ？」

適当に「物体X」なんて思ったが、これはなんだ？一つ目の、ふにょふにょしてそうな生き物、というか生き物なのだろうか？

「これもフレンズの一種なのか？にしては何か違いすぎるか、ここのマスコットキャラか？」

なんて呟きながら、屈んでそれを見た、その時

「あっ、だめ!それはセルリアンだよ!逃げてー!」

［　セルリアン　］

それまで快活で朗らかな声色で話していたサーバルちゃんの、真剣な大声が僕を焦らせた

「えっ・・?セル?、っとと」

僕はその物体 ”　セルリアン　” から急いで離れようと立ち上がろうとして、そのまま後ろへ尻もちを突くように倒れた

そのセルリアンがフヨフヨと弾みながら寄ってくる

僕はすぐ立ち上がって体勢を整えーーー

「うみゃみゃみゃみゃみゃーー!!」

サーバルちゃんの手が、光って唸った

「えーーい!!」

バシィ!!

パッカーン

物体X、セルリアンは小気味良い音を鳴らして砕け散ったのだった

「あれはセルリアンっていうだよ、ちょっと危ないから気をつけてね!」

どうやら僕は、また恥ずかしい所を見せてしまったようだ

こういうときは大体格好付かないんだよなぁとは思うところがある

「危ないやつだったのか、ありがとうサーバルちゃん、助けてくれて」

「えへへ、どーいたしまして！」

「でもあれくらいのサイズなら、自慢の爪でやっつけちゃうよ！」

頼もしげに、エッヘンするサーバルちゃん

セルリアンか、まさかフレンズと敵対（？）しているような存在がいたなんて驚いた、どうやらジャパリパークというのは、ただ心地の良い世界というだけでは無いようだ

少し考えれば確かに、まるで怪異が形を成したような見た目をしていた気がする、直接叩いて倒せるという実態のある存在みたいだから、怪異そのものでもなさそうだとも思う

だが気を付けた方がいい存在のようだから用心しておこう

～～～～～～

さらに歩いて行って、すこし休憩することにした僕とサーバルちゃん

「ここでちょっときゅーけー！」

パタッ

「たいよーがいちばんあつい時間は、下手にうごいちゃだめだからねー」

サーバルちゃんは地面の上にポテっと寝そべって、僕は木を背もたれにして休んだ

僕も同感だ、今でこそ克服した体だが、この日差しは吸血鬼にとって天敵なんだろう、もし僕が「成り立て」の頃だったらあっという間に灰になっていそうな、そんな日差しだ

「あとで水も飲もーね、こっちもおすすめの場所があるんだー」

今一休みしている、この大きな木もサーバルちゃんのおすすめの場所みたいだ、サーバルちゃんの縄張りの広さはすっごーいのかもしれない

「あーあ、鳥のフレンズならヒョイっと飛んでいけるのになー」
鳥のフレンズ?鳥にもフレンズが居るのか、この世界で、僕はまだ何も分かっていない
「フレンズって、もっと色々居るのか?このサバンナだけじゃなく、他にも」
「いるよ!私よりも強くて怖くて、おっきい猫科の子もたっくさん!」
どうやらサーバルちゃんは、自分が猫科の動物ということを分かっているみたいだった、僕は不思議とそこに感心した、だが、大きな猫科と聞くと、獰猛な動物が頭をよぎる
「え、そのフレンズには・・出会ったら襲われたりしないのか?」
「そんなこと〜」
ないよな、フレンズ同士なら仲良くできーー

「たまーに、きげんがわるいときだけだよ」

「・・そうか」

　そうなったとき、かつて、八九寺に噛みつかれた時のように、殴って気絶させてしまうようなことは、このジャパリパークという世界のフレンズに対してできそうにない、ならばその時は甘んじて噛みつかれよう

「あっ、でもさっきのセルリアンには注意だよ」

　先ほど遭遇した、サーバルちゃんにやっつけられた奴を思い出す

「ほんとはこのへんにはあんまり居ないはずなんだけどー」

「さっきのサーバルちゃん、なんか凄かったな、手が光ってたみたいだけど」

　サーバルちゃんにはとある師匠がいて、修行の結果、明鏡止水の境地に至っているのかもしれない！

　なんて、そう、まさに漫画やアニメの主人公みたいだ、僕にも必殺技の１つや２つくらいあったりしないものだろうか、何かとやられ役になりがちな僕である

「フレンズの技だよ！また出てきたら私にまかせて！」
　頼もしいサーバルちゃんに僕は笑みを隠せない、すると突然
「あれ？コヨミおにいちゃん、あんまりハァハァしないんだね」
「え？」
「あんまりハァハァしてないね！」
「まぁ、うん、そうだね、僕がサーバルちゃんにハァハァなんてしていたらイケないんじゃないかな？いや、ちょっと待った、でもそれはサーバルちゃんに魅力が無いなんてことはないんだよ、ただ決して僕に幼女趣味があるなんてことがないだけで、大切な事だから二度言うけれど、僕がハァハァしていないからといってサーバルちゃんに魅力が無いなんてことは決して思っちゃいないんだ、なんなら君の魅力へのアンサーとして僕は今すぐ君を抱き締めたって構わな」
「んーと、よくわかんないや！」

「けっこう歩いたのに、もう疲れてないんだね！」

「うん、そうだね」

危ない危ない、学生紳士である僕としたことが、疲れてないか心配してくれたサーバルちゃんの純粋な言葉に惑わされてしまった、きっとこのサバンナの太陽の日差しに当てられてしまったんだな、ふう、まったく僕らしくない

「私、コヨミおにーちゃんのすごいところ、だんだんわかってきたよ！」

なんだろう、とっても嬉しいぞ！

僕も、サーバルちゃんの事を分かってきていると思う

「コヨミおにーちゃんはきっと素敵な動物だよ！楽しみだね！」

目眩がしそうな言葉に、僕はうっかり惚れ込んでしまいそうだった、いや、惚れるという点では、もう出会った瞬間からそうなっていた僕である

あれこれと心配せずいられるのも、一人じゃないからだろう、僕は至って前向きで居られた
前向きで居られるなら、あちこち見たり振り返る必要なんてないだろう、ならば僕は身を任せよう、このジャパリパークという世界に

サーバルみんみ　3

〜〜〜〜〜〜

サバンナを行く道すがら、大きな木が目に入った

「おおきいでしょー　サバンナにはところどころに木があるんだよ！」

サーバルちゃんの言う通り、鬱蒼とそこらじゅうに生えまくっているのではなく、まさにところどころ、そこかしこに大きな木が生えている

「あっそうだ！木登りができると逃げたり隠れるときべんりだよ」

逃げたり隠れたりというのは、さっきのセルリアンというのに遭遇したときのことだろうか

「ちょっとやってみない？」

「えっ？」

言うが早いか、そう言った途端

「みゃーみゃみゃみゃみゃみゃみゃみゃみゃみゃーーー！」

ミャーミャー言いながらあっという間に大きな木を登りきってしまったサーバルちゃんだった、なんという猫

「ねっかんたんでしょ」

こんなに大きな木をまるで地を走るように登るなんて曲芸染みたことを、これまた簡単にやってのけた

「僕には簡単じゃ無さそうだ・・」

降りてきたのも早いサーバルちゃんが、さっきのより小さめで僕向けの1本を見繕ってくれたようだ

「これだったらどうかな?」

うん、これくらいなら僕でも力技で登れそうだ

「よっ、ほっ・・!」

さてと、僕もサーバルちゃんみたいにミャーミャー叫んだらササッと登りきれるのだろうか

「みゃあーみゃみゃみゃみゃみゃみゃぁー!」

・・・・・・

なんて叫んで登ってる途中、サーバルちゃんも登ってきてあっという間に「みゃみゃみゃみゃー!」と追い越された

「いーでしょ、木登り!」

サーバルちゃんに手を引かれて登りきって、しばしサバンナの景色を一緒に見る

「・・・・」

普段自分が目にしない、居もしない大自然の中に今僕は居る、なんとも言葉にならない、只々僕はこの広がるサバンナという大自然に圧倒されていた

「水場はあそこだね、いこっか!」

〜〜〜〜〜〜〜〜

また進んだ先に、サーバルちゃんのお勧めらしい水場があった

「みずだーー！」

水場1つにもこれまでのように喜びを見せるサーバルちゃん、急勾配な坂道を上がりきった先に、その水場はあった

サーバルちゃんは直接その水場へと口をつけて水を飲み始めた、これまでの道のりで僕も喉が渇いていたので、僕も手で掬って水を飲んだ

「おいしー！」

サーバルちゃんの嬉しそうな、朗らかで幸せそうなその笑顔に僕も笑みを隠せない

「あははは♪」

顔を見合わせただけで微笑んで笑ってくれる、なんて良い子なんだろう

君が笑ってくれるなら僕は悪にでもなる！

「けっこう歩いたねー」

歩いたし、滑ったり飛んだり、何かやっつけたり登ったりもした

「あ、あそこ！休憩した木陰だね！」

うっかり僕がハァハァしてしまったところだ

「けしきを見ながら水のむと、生きかえるよねー！げんきげんき♪」

「サーバルちゃんはずっと元気に見えるぞ」

「えっへへー　まぁね！」

とっても「ニャン」ポーズが決まっているサーバルちゃんである

「にしても今日はすいてるなぁ～いつもばしょとりになるくらいのばしょなのに」

「そうなんだ」

「こわーいだれかでもいるのかなー？」

まいったな、周りには誰も居ないだなんて意識させちゃうサーバルちゃん、なんて魔性なんだろう

そんな魔性に当てられて、余りにも可愛いんだからもうそろそろ何の意味もなく抱き締めたくなってきた

なんて思って、何となくサーバルちゃんへと手を伸ばそうとし　ーーー

「だぁーーれぇーー??」

「ってうわぁぁぁぁぁぁぁや、やったぜ!!」

僕は驚きながら、新たに現れたフレンズらしき女の子のプロポーションと、やや刺激的な服装に驚きと喜びの雄叫びをあげてしまった

仕方がない、何故なら僕は思春期真っ盛りの、健全な高校生の男の子なのだから

「失礼、水浴びをしてましたのー」

「あ、カバ！」

どうやらこのフレンズの女の子、というよりは”お姉さん”と思わしきフレンズは、カバのフレンズだったようである

「珍しいわねサーバル、この辺まで遊びに来るなんて」

「これから図書館まで行くんだ！お水を飲んで行こうと思って」

このお姉さんはどうやらサーバルちゃんと顔見知りのようだ、なんというか、うん、決していやらしい目で見てるわけじゃないんだけど、僕の高校生の男の子的な部分をくすぐって仕方がない

［厭］

「今日はフレンズがすくないねー？」

「今日はセルリアンが多いから、皆あまり出歩かないのですわ」

”セルリアン”ここまで来る途中に遭遇した変な物体はフレンズたちにとって、隠れるか戦うかという、どちらにしても危険な存在なのだろう

「ゲートにもちょっと大きいのが居るそうよ、気を付けるんですのよ？」

「じゃあ、わたしがやっつけちゃうよー！」

自信たっぷりなサーバルちゃん、それにしても、生まれたばかりらしい僕はフレンズ会話に入れないで居た

「サーバルがですのー？心配ですわ～」

「だいじょうぶだよ、さっきもやっつけたもん！」

「どうせ小さいやつでしょう？」

「な　なんでわかったのー？」

正直なサーバルちゃんである、何となく二人の間柄が伺える

「ところでー」

唐突に、カバのお姉さんフレンズの視線が僕の方へと向いた

「その子はどちら様?」

「こよみおにーちゃんだよ!」

「こよみ・・?聞いたことない動物ですわねぇ」

「なまえはさっききいたの、でも何の動物かわかんないんだって」

さて僕という人間は、吸血鬼・・の倦属は、果たしてこの世界に置いてはなんのフレンズなのだろうかと少し思ったが、しかし僕自身は人間だと信じている

だが、この世界のフレンズは”人間”と聞いても分かるのだろうか?動物が謎のサンドスターの力でフレンズになるとして、およそ人間がフレンズになったところで分からなさそうではある

「それで　としょかんに行ったらいいんじゃないかなーって」

しかし今の僕は、サーバルちゃんにジャパリパークを案内してもらいたいし、一緒に居たいのでそういうのは別に今は分からなくても良いと思った

「こよみおにーちゃんがなんのどうぶつかわかったりしない？」

「んー・・」

［問］

「あなた、泳げまして？」

僕が何のフレンズかを見抜くための質問だろうか、泳げないということはないが、特段得意だということでもない

「まぁ、それなりには」

「空は飛べるんですの？」

そらをとぶ、かぁ、そんなポケットのモンスター的な技が僕に使えるなんてことはない、いつだったか斧乃木ちゃんの”　アンリミテッド・ルールブック　”というので「飛んだ」ことはあるが

まぁ僕のことだ、ギャグパートになれば出来るかもしれない

「その気になればもしかしたらできるかもしれない！」

いつだってロマンティックを忘れない僕としては、つい見栄を張ってしまったと言える

「んー、じゃあ　足が速いとか？」

流されてしまった、どうやらこのカバのお姉さんには僕というキャラクター性を見透かされてしまったようである

「心にピンときて捕まえる対象がいれば・・」

いつだって八九寺を見つけた時の僕は公道最速伝説だ

「あなたよくわからない変な子ねぇ～？」

どうやら僕は変な子らしく、ちょっと困られてしまった

「そ、そんなことないよ！」

サーバルちゃんが僕を肯定してくれた、この子から出される言葉はどれもポジティブでたまらない

「ふふっ、まぁサーバルみたく足も速いし、鼻も耳も良いのにおっちょこちょいでぜーんぶ台無しになってる子も居ることですし」

そうなのか、全くサーバルちゃんは可愛いな！

「気にする事ないですわ」

「ひどいよー」

「私も泳げませんしねぇ」

「えっ？そうだったのー?!」

へぇ、カバって泳げないのか？水の中に居たのなら泳げるものだと思ったんだが、そうじゃないのか、動物の事で1つ賢くなった僕である

「ただ」

ふと真剣味が足された顔でカバのお姉さんが言う

「ジャパリパークの掟は自分の力で生きること、自分の身は自分で守るんですのよ」

やはりこのフレンズは大人な感じがする、フレンズはただ”動物になった女の子”というだけの存在じゃなさそうだと思える雰囲気が、このカバのお姉さんにはあった

「サーバル任せじゃダメよ?」

「はい」

ここまで来るにあたってあったことを思い返して、これから何かあったときにはできれば僕が何とかしたいなと思う

「じゃあ　わたしたちいくね!」

さて、カバのお姉さんにお別れを告げ―・・・

「あ、セルリアンと遭ったら基本逃げるんですのよ？どーしてもたたかうときはちゃんと石を狙いなさい」

「うん！」

――・・・

「あと、暑さに気をつけるんですのよー？特にサーバル　あなたほとんど汗をかかないんだからぁ　今のうちに水も沢山取っていきなさい」

「はぁーい」

――・・・・

「それにね　上り坂や下り坂で足をくじかないように気をつけるんですのよ」

「大丈夫だよー！」

さきほどのしたたかさがあった言葉が嘘みたいなほどに、世話焼きなフレンズだった

サーバルみんみ　4

「もうちょっとでゲートだよ、ここのひらたいのが目印なんだー」

カバのお姉さんと別れてからしばし、その先には案内板らしき物があった

いや、なんというか、こう・・・　〝　おっちょこちょい〟　らしきサーバルちゃんなら、「あれー?どっちだったかなー?」とか「迷っちゃったー!」みたいな迷子イベントがもしかしたら発生するんじゃないか、というのを予想してたんだけどそんなことは無かったようだ

「へぇ、ほんとに詳しいんだなサーバルちゃん」

「えっへん!」

なにかと自信たっぷりな仕草が似合うサーバルちゃん、うん、実に愛らしい

「あ!-もうさばんなちほーの出口がみえてくるよー」

「え、そうなのか?」

どうやらサバンナ地方の出口に差し掛かったようだ、それにしても中々に長い道のりだったなぁ、それはもう第4話まで掛かってしまうくらいには・・・流石は回りくどいモノローグやエピローグを語る僕の所業なだけはある、おいそれとトントン拍子で話を進ませやしない

まぁあれだ、サーバルちゃんの「すぐ近くだよー」はサーバルちゃん自身のバイタリティ基準のものなのだろう

さて、その案内板には箱が取り付けられていて中に紙が入っていたので、僕はそこから紙を取りだして広げてみた

どうやらガイドマップのようである

「あ、なにこれ？ちほーのばしょがわかるの？」

「みたいだな、あれ？もしかしてサーバルちゃんはこれを見たことはないのかい？」

「うん、ないない！」

どうしたことだろう？この案内板があるのを知っていて地図の存在を知らなかったなんて、まぁ、何処かにいくにしても迷うことがないなら必要もなく、見る機会も無かったのだろうか

「いまはさばんなちほーで、となりがじゃんぐるちほーだからぁ　いまここかぁ」

ジャングル地方？ジャパリパークにはサバンナとジャングルが隣接しているのか、なんだか凄いなと思う

「いいなーこれ！どこにあったの？」

「ここにあったんだけど」

地図が入っていた箱を指差してみるとサーバルちゃんがそれに気付く

「えぇー？ぜんぜんしらなかったー！どうやって出したのー」

なにやら箱をカリカリしているサーバルちゃん、開け方が分からないのだろうか？その仕草もまるで猫みたいである

これはもしかしたら、開け方を教えてあげるだけで「すっごーい！」ってなるのではないのか？

なんて、そう考えた時　――――

「ーーアァーーーーっ!!」

［　悲鳴　］

「!?」

――叫び声?どこからだ?わからない僕はサーバルちゃんを見る

サーバルちゃんの表情には少し真剣味があった、女の子の悲鳴、サーバルちゃんのこの表情、僕は何事かおよそ目星が付いた、さきほどの僕自身の接近遭遇、カバのお姉さんから聞いた言葉

「またセルリアンか!?」

サーバルちゃんが声がしたほうに駆け出した、僕もこうしちゃいられない

駆けつけた先――

そこには巨大な怪異――まるで蜘蛛が巣を張ったようなやつが居た

「こいつも・・セルリアンなのか?」

ここまで来る道中で出くわしたセルリアンとは余りにも違う形と大きさだった、だが、あの”1つ目”だけは共通している

「さっきのあの声、誰か食べられちゃってるかも知れない!」

「食べられ・・?なんだって!?」

よく見ると怪異の中には女の子が漂っている

怪異――セルリアンに取り込まれていた、なんてことだ、まさかフレンズを溶かしたりして食べるのか?まずは器用に服だけ溶かしちゃったりして、この世界 ”ジャパリパーク” に似つかわしくないような場面になっちゃったりするのか!?

駄目だ、それは!!

「今すぐ助けよう!」

まさか、こいつらセルリアンというこの怪異――のような物体、怪異だという確信は無いが、フレンズを食べるというのか?なら見過ごしてはいられない

「うぅおぉぉぉーー!!」ダダダダダダ

「こよみおにいちゃん!?」

【　疾　】

特になんの策も無いまま、僕はセルリアンへ・・・というより、セルリアンに取り込まれたフレンズへと走った

――！

途中伸ばされてきた触手のようなものを避けて、取り込まれた女の子へと目掛けてセルリアンの中へ―

未知なる領域へと僕は飛び込んだ

何故だかすんなりと入り込めてから、そのままの勢いで怪異に取り込まれた女の子を抱きしめて抜け出そうとするが――

「・・っうぅ・・・あれ・・?」

なんだろうか?脱力感・・力が抜けていくような、まるで目眩のような感覚に襲われてしまって思うように動けない

「こよみおにいちゃん!」バッ!

――!

「うみゃ!?・・みゃ?・・・うみゃ?」

「えー？石がないよー！こんなのはじめてだよー・・」

サーバルちゃんが何とかしてくれようとしているのか、だが一筋縄ではいかないようである、かく言う僕もこのままだとこいつに喰われてしまうのだろうか――――

「ちょええぇーーーーー!!」

ドンッ！

「うわあぁぁあーー!?」

端的に言うと、僕は蹴り飛ばされた

忍に蹴り抜かれて大きく傾いだその巨大なセルリアンは、ゲートから触手を離してフワフワと浮遊し、今は僕の前に立つ忍へと目を向けている

――どうしても戦うときは――

カバのお姉さんが別れ際に言っていた事を思い出す、サーバルちゃんと居た所から真っ直ぐ向かって、ゲートの真向かい側へと蹴り飛ばされ、セルリアンから飛び出した時に見えた石、あれか

こっちを向いている、ならば背面には

「今だ！サーバルちゃん！」

僕の行動と、思いもよらぬ闖入者――忍の乱入にあっけに取られていたサーバルちゃんが僕の声に素早く反応し、素早く駆ける――

「うみゃあーーーーーっ!!」

水の一滴（ひとしずく）が見えていそうな、サーバルちゃんの腕が光って唸る

「ええーーい!」

サーバルちゃんの爪がセルリアンの背面にあった石に炸裂し、文字通りセルリアンは炸裂して消えた

その時、セルリアンを倒したサーバルちゃんよりもその向こうに、カバのお姉さんの後ろ姿があった

「変わった子ね・・・でも、見ず知らずのフレンズを助けようとしたのね」

すぐに姿を消したが、もしかしたらカバのお姉さんはここにセルリアンが居るのを知っていて、近くまで付いて来てくれていたのかもしれない、やはり良い人だろう・・いや、良いフレンズなんだろうな

～～～～～～～～

それにしても、セルリアンに取り込まれていたフレンズは僕が抱き抱えていたので大丈夫だったが、僕はちょっと痛かったぞ忍

でも、助かって、助けれて良かった

「助かったよ、忍」

「っふん！・・全くじゃ！喰われればどんなことになる怪異かも分からぬのに馬鹿正直に飛び込みおって！」

「あぁ、感謝してるぞ」

ただ僕は、すぐになんとかしたかった

あの状況で、なにもできないまま見ているだけでいたら、僕はきっと後悔するんじゃないかと、それを思い出したときにもまた後悔するかもしれないだろうなと、ここに来てからサーバルちゃんに助けられっぱなしな僕だからこそ、フレンズを助けたかった

「大馬鹿者もいいところじゃぞ、お前様よ」

「悪かった、でも忍、お前が居るならって思ったからな」

ああ、僕は大馬鹿だ

助けたら自分が死ぬんじゃないかって思うくらいに怯えながら、死にかけているお前を助けるくらいには――

「・・あれ?どうしたんだサーバルちゃん」

なにやら俯いて、サーバルちゃんが無言でこちらへと歩いてくる、どうしたんだろう、ちょっと恐怖だぞ?

もしかしたらサーバルちゃんも僕の無茶な行動にお咎めの1つや2つあるのだろうか

まずいぞ・・! ”なんでそんな危ない事するの!”とか ”二人とも食べられちゃってたらどうするのー!”とか、もしサーバルちゃんにそんなことを涙ながらに言われてしまったら、僕の繊細な硝子の少年の如きハートに大きな破片が刺さってしばらく立ち直れなくなってしまう――!!

「・・・・すっっごーーい!!」

どうやら、忍のほうだった

「さっきのあれなにー!?ヒューって飛んでいってバーン!ってセルリアンを通りぬけたわざ!すごいわざだね!ねぇどこから来たのー?君はなんのフレンズなの～～!!?」

忍の両肩を掴んではガックンガックン揺らしては質問しまくるサーバルちゃんだった

さて両者初対面・・・と思ったが、忍はもしかしたら僕の中に居る時からこの子を見てたかもしれないか

「んぁぁぁぁぁぁぁぁ～～!やめんかぁー!!」　ビシィィーーッ!

サーバルちゃんにチョップをかましているのであった

「いったぁーい!もー!なにするのー!?」

「全く、なんじゃこやつは、やかましい小娘じゃのう」

「おい駄目じゃないか忍、優しくしてやれよ」

「そうだよー　おともだちになろーよ！」

とても懐の深いサーバルちゃんは打撃を浴びせられたにも関わらずめげずに歩み寄っているが、忍は「ふん！」とつまらなさそうにして僕の影の中へと消えてしまった

「えぇーーー!?もぐっちゃったー??あれー？でも穴があいてないよー？」

僕の影の、忍が消えた所をペシペシ叩いているサーバルちゃん

「うみゃ～??どうなってるのー？」

「あいつは今僕の中に居て、名前は忍っていうんだ」

「えぇーーー!?こよみおにいちゃんの中にいるのー!?そうなんだーうぅわぁぁあ～ふっしぎー！よろしくね　、しのぶちゃん！」

とても興味津々といった感じで僕の影に対して挨拶をし、周りをピョンピョン跳ね回っているサーバルちゃんである、もしかして僕の影の中に入ろうとしているのだろうか

さて、それよりも、先ほどセルリアンに囚われていたフレンズの女の子が無事か確かめなくては

ポニーテールで、ショートパンツか？ホットパンツだろうか？を履いている、白と黒のツートンカラーが映えるこのフレンズの女の子

そうだ、もしかしたらまださっきのセルリアンに取り憑かれているかもしれない、ここは隅々まで確認を――

「どうやら、気を失って眠っているだけみたいだな」

だなんてことはしない、相手が八九寺ではないし、今ここにはサーバルちゃんも居る、なんとも分別のできる紳士な僕である

「よかった、たすかったみたいで！」

とりあえず眠っているみたいなので、またセルリアンに襲われないように茂みの中にそのフレンズを隠しておいてあげよう

～～～～～～～

そんなこんなでサバンナの出口であるゲートを越えてからしばし、もう日も暮れていたのでそろそろ休むことにした

「ねっ　あしたどこ通っていこっかー？じゃんぐるちほーっておおきい川があるらしいよ！」

明かりの射す案内板の側で休もうと座りこんだところで、サーバルちゃんはというと「たのしみだなー！」とピョンピョン跳ね回っているいる

「サーバルちゃんは元気だな」

「やこーせーだからね！」

何故かグッと親指を立てるサーバルちゃんだった

今日は色々あって疲れているのだが、まぁなんというか、この子を見ていると心が癒される

「じゃんぐるちほーもフレンズがたくさんいるんだって！」

「それは楽しみだな」

「うん！おもしろいことがいっぱいありそうだね！」

灯りから逸れて、なにやら暗い所で爪研ぎをし始めるサーバルちゃん

「あまりそっちへ行くと危なくないか？」

「だいじょうぶ！やこーせーだから！・・・みゃあああー!?」　ドシーン！

「え・・サーバルちゃん!?」

爪研ぎで木を倒してしまうとは、困ったニャンコである

「びっくりしたー」

「大丈夫みたいだな・・・」

――――ん？

なんだかピコピコと音が聞こえたような、そして、サーバルちゃんの隣の奥で光る何か

「サーバルちゃん後ろ！」

セルリアンだろうか!?

「またか・・?」

身構えるサーバルちゃんと僕だったが―

そのピコピコと音を鳴らして現れた小さな物体――生き物なのか?なんだろう?僕はその物体を屈んで凝視した

つぶらな目、大きな耳、謎のベルトに謎の・・・レンズか?そして尻尾、まさにマスコット的な風貌の、青と黄緑と白の爽やかな3色ボディをした―

「・・・ボス!」

「え?」

「だいじょうぶ、しりあいだよ」

ボス、この小さな・・・ロボット?の名前だろうか、サーバルちゃんが話し掛けてい

るし害は無さそうである

「ボス、こよみおにいちゃん何のどーぶつかわかんないんだって!住んでるところまで一緒にあんない・・」

そのボスとやらはサーバルちゃんに話し掛けられているにも関わらず、不思議な電子音の足音を鳴らして僕に近付いてきた

「ハジメマシテ　ボクハ　ラッキービーストダヨ　ヨロシクネ」

「えっ・・と?阿良々木暦だ、よろしく」

どうやらこの小さなロボット?はボスという名前ではなく、ラッキービーストというらしい、そしてやや電子音気味だが喋れるみたいだ、なんだかとてもアニメっぽい存在である

「・・・!・・・!」

「どうしたんだサーバルちゃん?!なんだか面白い動きしてるぞ!」

何やら驚いてワナワナプルプルしながらラッキービーストを見ているサーバルちゃん、どうしたんだろう

「うぅーわぁあーーー!しゃべったぁぁあーー!!」

パパ～パパッパ～～

なんだか頭の中で、良い感じの音が鳴ったような気がした

コツメわーい　1

　安心していい存在だと分かり、僕はそのラッキービーストの前で座りこんで、先程まで落ち着きの無かったサーバルちゃんも隣でお行儀よく座っている

「普段は喋らないのか？」

「はじめてこえきいたよー　なんで？　えっボスってしゃべれたの??」

　食いぎみにラッキービーストを見ては喋りかけているサーバルちゃんである、しかしそんなサーバルちゃんを流して僕に近寄ってくるラッキービーストである

「コヨミ　　キミハナニガミタイ？」

「えっと・・・図書館へ行こうとしてるんだけど」

サーバルちゃんは”僕が何の動物なのか調べる”という経緯と理由で図書館へと案内してくれている、だが僕はというと僕自身の成り立ちよりもなぜここへ僕が来たのか、もしくは連れてこられたのかとか、元の場所へ戻る手掛かりになるものや、それに繋がる取っ掛かりとなる事が分かったりしないかと考えている

だが

”考える”　事と　”思う”　事は、別だといえる

「ワカッタ　トショカンマデノルートヲ　ケンサクスルヨ　ソノマエニ　ジャパリパークニツイテハナスネ」

どうやら、ラッキービーストによるジャパリパーク講座が聞けるようである、僕自身、この”ジャパリパーク”はサファリパークのような自然溢れる所でフレンズという女の子がいてセルリアンという怪異みたいなのがいる世界としか分かっていない

これはしっかり聞かないとだな

「ジャパリパークハ　キコウヲモトニシテ　イクツカノチホーニワカレテイルヨ　ソレゾレニドウブツ　ショクブツガテンジサレテイルンダ」

聞かないと・・・・

「オオキクミッツノキコウタイニブンリ・・・・」

きかＮＩＧＨＴ・・・

「フレンズトヨバレルイキモノタチデ・・・」

ここ”ジャパリパーク”にきてから、慣れない地を動き回った僕は至って疲れていたのだろう、うつらうつらとしていてラッキービーストの声が耳に入ったとしても、頭に入ってこなくなっていた

ついに眠気に勝てなくなり、頭が落ちてきてしまった僕だった

「カノジョラハドウブツヤソノ・・・・・・ア　」

「ケンサクチュウ・・・・・エラー　エラー」

「あれ？」

「エラー　エラー」

「ボスってば、こよみおにーちゃんのちゃーむぽいんと見てるー！」

「エラー　エラー・・・ア　」

「えらーってなに？あっ　こよみおにーちゃん寝ちゃったね　きょうはいろんなことが

あったからなー　つかれちゃったんだねー」

「でもびっくりしたよー　ボスがしゃべれたなんて　はじめてきいたけどふしぎなこえしてるんだね」

「・・・」

「みんなボスとおはなししたいとおもうよー　なんでいままでしゃべらなかったのー？」

「・・・・・」

「ねーなにか言ってよー！」

「・・・・・・」

後で聞いたことだが、この夜なか中サーバルちゃんは「しゃべってよー」とか「ねーってばー」だの、ラッキービーストが言っていたらしき言葉を真似て「えらー！えらー！」等と言ってラッキービーストに話しかけていたらしい

コツメわーい　2

ラッキービースト、サーバルちゃん曰く、ボスという扱いらしいジャパリパークの生物・・いや、ロボットだろうと思うが、そのラッキービーストから色々な事を聴いている時に僕は寝こけてしまったようである

「え・・・あれ?」

朝になっているようだが、サーバルちゃんの姿が見当たらないな

と思ったら背後でガサガサと草を鳴らしてサーバルちゃんが現れた

やせいの　サーバル　が　とびだしてきた!

「おはよー、きのうとちゅうで寝ちゃったんだよ」

「昨日・・そうだったのか」

ラッキービーストには悪いことしたなと、近くで僕を見つめる、この不思議な存在に目を合わせる

「オハヨウ　コヨミ　ジャア　シュッパツショウ」

「うわーー!・またしゃべったーー!!」

また驚いているサーバルちゃんだった

〜〜〜〜〜〜〜〜

「ジャア　カクニンスルヨ　モクテキチハ　ジャパリトショカンダネ」

「うん、僕が何の動物か調べるのと・・・」

元いた我が家、元の場所への戻り方、まさにセカイ系な言い方になるだろうが、元の世界への戻り方・・・

「わたしはつきそいっ」

今この瞬間、僕は「急いで元の世界に戻りたい！」なんて思っていないことを強く感じたのである

何かに強制されているわけでもなく、僕が頼んでるからでもなく、こうしてサーバルちゃんが付き添ってくれるのが僕には堪らなく嬉しくて、こんな純粋な気持ちでついてきてくれるのだから、もう、僕の心はメロメロだった

「ワカッタ　ジャア　トショカンマデノルートヲ　ケンサクスルネ」

ピロピロピロロロ～～,,,

「おおーー！」

「ロボっぽい！」

最初はなにかしらジャパリパークにおける謎の生物かと思ったが、これはロボットだろう、このピロピロ音は紛れもなくロボだと決めつけた僕である

「ジャパリトショカンハ　シンリンチホーニアルヨ
トチュウ　ミッツノチホーヲトオルネ　タダ　トッテモキョリガアルカラ　アルイテイクノハオススメデキナイヨ」

「ジャパリバスニノッテ　イドウショウ　ココカライチバンチカイノハ　アンインバシノソバダネ」

「へぇ、バスに乗れるのか」

「バス？ってなにー？」

近代的な乗り物があるようだ

「ジャパリバスナラ　ヒロイパークヲマワルノモラクチンサ」

「へーーー！」

「バスノチカクマデハ　ジャングルヲアルクケンガクルートガオススメダヨ」

見学ルート？やはりこのジャパリパークというのはそういった趣の広大な施設なのだろうか

「ソレデイイカナ」

「あぁ」

「うん！」

サバンナチホーを出る時に通った大きなアーチや途中にあった案内板、バス、そしてこの喋るロボのラッキービースト、人が作ったものだろうにしては人は居ない、今ここ”ジャパリパーク”に居る以上、もっとジャパリパークを知っていこう

「ソレジャア　ガイドヲカイシスルヨ　アンナイジカンハ　ニジカンホドダヨ」

「「おーー!」」

目の前で楽しそうにしているサーバルちゃんの笑顔を見て、もうなにも考えなくていいなと思った